

【伝える 私の戦後70年】博多大丸・戸上雅雄元専務(2)

2015年02月27日 03時00分 更新

記者：仲山美葵

◆華やかな舞台の裏で

1957年。福岡市の博多大丸に入社し、波乱の百貨店人生が始まりました。

当時は博多駅に最も近い百貨店で、呉服町の電停前にありました。何でも最新で、エスカレーターは九州初。7、8階には帝国ホテルが入っていました。私は文具や玩具の売り場に配属され、修学旅行生が来る日は忙しく“豆台風”と呼んだものです。



私は水泳ばかりしてきたので、どうしても仕事で認められなかった。会社を学ぶには組合活動が一番だと思いました。ですが当時は労働争議至上主義。24時間のストライキを繰り返すなど、客商売として考えられないことをしていました。

組合員から異論が出始めたころ、有志でつくる「労働問題研究会」に加わり、組合としての生産性向上について勉強会を重ねました。その後、メンバーで組合幹部に立候補。私も書記長や委員長を務めました。

激しい組合活動は、大丸本社からの出向者と現地採用者の格差が大きかったことも一因だと思います。人間関係もぎくしゃくしていました。高卒社員の中には、親の戦死で大学進学を諦めた優秀な人が多くいましたが、そんな環境では人材を生かせない。私たちの研究会は当初、組合から「会社の犬」と批判されましたが、組合を分裂させずに変えようと必死でした。

63年には博多駅が現在地に移転、店との距離が広がりました。33歳で食器や美術工芸品売り場の課長になった私は、店に足を運んでもらおうと、他店にも少なかった有田焼の香蘭社（佐賀県有田町）の売り場や、海外のコーヒーカップの売り場を作りました。これは当たりでしたね。

その後は婦人服の担当に。カラーシャツもちょうネクタイも、最初に身に着けたのは私です。上司に「お客さまより目立つとは何事だ」と怒られるような時代でしたが、とにかく新しいことが好きでした。

帝国ホテルが撤退した跡にはヤングのファッションフロアを開設しました。高度成長期に

団塊の世代が20代に突入し、流行を売る産業が躍進した時代。人気歌手のにしきのあきらや藤圭子のコンサートなど、ほかの百貨店ではやらないイベントも手掛けました。

でも、博多駅の移転以降、収益は悪化していきます。71年には福岡市・天神に福岡ショッパーズプラザがオープン。天神がにぎわいを増す一方、呉服町の地盤沈下は止まらず、華やかな売り場とは裏腹に社内のムードは最悪でした。博多大丸が天神に移転することが決まったとき、みんな跳び上がって喜びました。

<http://qbiz.jp/article/96922/1/>